

# 分裂文の派生と焦点要素について

## ラベル付けアルゴリズム分析とカートグラフィ分析の観点から

下仮屋 翔

### 1. はじめに

英語の It 分裂文 (以下: 分裂文) の焦点要素は、名詞句と前置詞句が規範的とされるが (cf. Emonds (1976))、その観察が常に当てはまるとは限らない。(1)の事例は、一般的に分裂文の焦点位置では認められない形容詞に関する興味深い対比をあらわし、同一の統語範疇でありながらも、その容認性が様でないことがわかる。

- (1) a. \* It's **very unhappy** that Bill is. (Emonds (1976: 133))  
b. It is **happy** that we all most want to be. (Delahunty (1984: 77))

本稿では、ラベル付けアルゴリズム分析とカートグラフィ分析の観点から分裂文の統語派生を提案し、上記の文法性の対比を原理的に捉える。具体的には、分裂文の焦点要素は非焦点節内に基底生成し (cf. Kiss (1998), Reeve (2013))、当該 CP の左端周辺部に移動したのち、ラベル付けの可否に応じて文法性が導かれると論じる。

### 2. 理論的枠組み

#### 2.1. ラベル付けアルゴリズム分析

近年の極小主義研究では、統語対象物のラベルに関する再定式化がなされ、最小探索 (Minimal Search) に基づくアルゴリズムが提案されている (cf. Chomsky (2013, 2015))。ラベルはインターフェイスでの解釈に欠かせない情報であり、下記のアルゴリズムに応じてラベルが適切に付される場合にのみ文法的な文が産出される。

- (2) 集合 {H, XP} において、H が主要部で XP が主要部でない場合、H がラベルとなる。  
(3) 集合 {XP, YP} において、XP・YP のいずれも主要部でない場合、  
a. 両者の Agree 関係に顕著な共有素性がラベルとなる。  
b. 片方の句が移動することで、留まる句がラベルとなる。

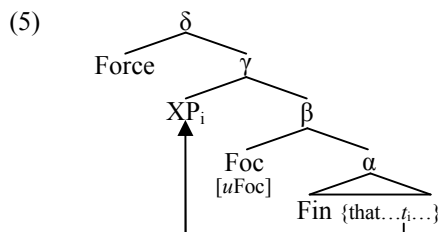
#### 2.2. カートグラフィ分析

階層性のある談話関連領域として CP 左端周辺部を精緻化するカートグラフィ分析のもと、Maeda (2014)は英語に関して(4)の構造を提示する。この CP 領域は派生的に構築されるものであり、Force-Finite が一体化した単一の主要部 C が必要な場合に分化すると考えられている。

- (4) [<sub>ForceP</sub> Force [<sub>TopP\*</sub> Top\* [<sub>FocP</sub> Foc [<sub>FinP</sub> Fin [<sub>TP</sub> ... ]]]]] (Maeda (2014: 131))

### 3. 提案と分析

本稿では、2節で導入する両分析に依拠し、分裂文の焦点要素は Focus 主要部の指定部位置に移動したのち、適切にラベル付けがなされる場合にのみ容認されると主張する。すなわち、左端周辺部をあらわす(5)の段階で  $\gamma$  のラベルが決定されるかどうか重要である (cf. (3a))。



ここで序論の観察に立ち返り、(1)の対比を鑑みると、同一の統語範疇に属する要素であるにもかかわらず、なぜ焦点化する際に容認性が様とならないのかが問題点となる。本稿では、当該要素が非焦点節内で異なる派生をたどった結果として、焦点要素への素性の付与に影響が及ぶことに帰せられると主張する。

Chomsky (2014)では、外的併合と内的併合の2種類が存在する理由として、両者が異なる役割を担うことが示唆されている。具体的には、前者は項構造の産出に関わるものであり、後者は談話関連構造の産出に関与し、焦点に関する情報なども担うものである。

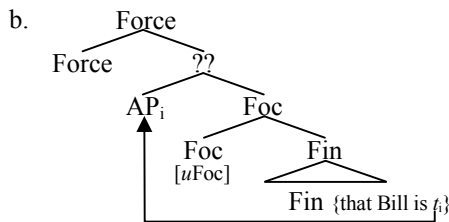
- (6) Duality of Semantics: EM yields generalized argument structure, IM yields everything else, specifically discourse-related structure like new/old information, focus, and so on. (Chomsky (2014: 13))

ラベル付けアルゴリズム分析では、主要部—指定部関係にある要素の解釈不可能素性がフェイズの形成時に照合される。このことを踏まえ(6)を発展的に捉え、フェイズ主要部の指定部位置に内的併合する要素には、ラベルが決定される際に談話関連素性(δ素性)が付与されると提案できる(cf. Nakajima (2016))。δ素性とは解釈可能な談話関連素性の束であり、Focus 主要部とも Agree 関係を結ぶことができるならば、左端周辺部において両者の共有素性<Foc, Foc>によりラベル付けがなされることで適文が産出されうる。

上記に照らして分析をすすめると、形容詞句が焦点化される(7a)の例では、非焦点節内が copular 文であり、フェイズを形成する要素はない。ゆえに、形容詞句‘very unhappy’は Focus 主要部の指定部位置への移動過程で δ素性を付与されることがない。その結果、(7b)に示されるように、移動先でのラベル付けが適切になされず排除される。

(7) a. \*It’s very unhappy that Bill is. (=1a)

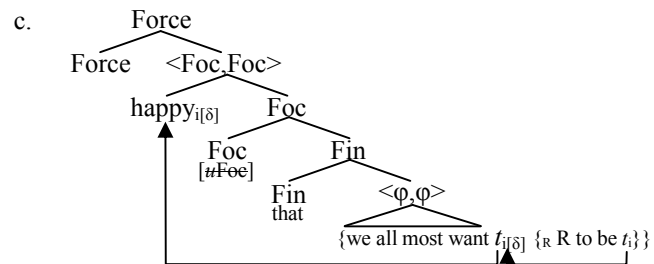
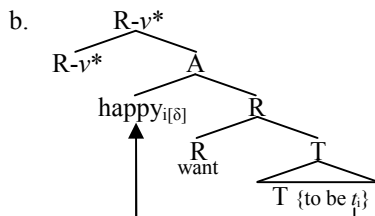
(Emonds (1976: 133))



他方、(8a)の例では、非焦点節内に他動詞‘want’が含まれており、形容詞‘happy’の焦点位置への移動経路にフェイズが介在することとなる。その派生を議論に関わる範囲で(8b, c)として示す。

(8) a. It is happy that we all most want to be. (=1b)

(Delahunty (1984: 77))



(8b)では、他動詞‘want’の root (R) が不定詞節‘to be happy’に併合し、完成した集合に対して形容詞‘happy’が内的併合する。その後、更に v\*が併合し、R が head-raising することで R-v\*のアマルガムが形成され、下位の R がフェイズとして機能する。そして、最小探査に基づくラベル付けが行われる際に、形容詞‘happy’はフェイズ主要部 R とともに検知されるため δ素性を付与される。なお、形容詞‘happy’は phase-edge に位置しており、依然として統語操作に可視的である。(8c)では派生が更に進み、左端周辺部が形成された段階を示している。形容詞‘happy’は、動詞句の形成時に δ素性を付与されていることから、最小探査で Focus 主要部とともに検知されると、両者の共有素性<Foc, Foc>によってラベルが付される。最終的に、すべてのラベルの決定に際して問題は生じず、適切に派生が収束する。

## 参考文献

- Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33-49.
- Chomsky, Noam (2014) “Minimal Recursion: Exploring the Prospects,” *Recursion: Complexity in Cognition*, ed. by Tom Roeper and Margaret Speas, 1-15, Springer, New York.
- Chomsky, Noam (2015) “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3-16, John Benjamins, Amsterdam.
- Delahunty, Gerald P. (1984) “The Analysis of English Cleft Sentences,” *Linguistic Analysis* 13, 63-113.
- Emonds, Joseph E. (1976) *Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure Preserving and Local Transformations*, Academic Press, New York.
- Kiss, Katalin É. (1998) “Identificational Focus and Information Focus,” *Language* 74, 245-273.
- Maeda, Masako (2014) *Derivational Feature-Based Relativized Minimality*, Kyushu University Press.
- Nakajima, Heizo (2016) *Shima no Chobo (View from Islands)*, Kenkyusha.
- Reeve, Matthew (2013) “The Cleft Pronoun and Cleft Clause in English,” *Cleft Structures*, ed. by Katharina Hartmann and Tonjes Veenstra, 165-186, John Benjamins, Amsterdam.